

〔史料編〕

尼崎市史古代・中世史料補遺（七）

樋口 天野 健太郎
ひぐち けんたろう
あまの 野 ただゆき 幸

〔室町時代 IV〕

四五五 忠富王記

文龜三年正月

十四日、吉書、西宮神郷・蘆屋トキ三郎四郎、垣富〔恒〕・難波

新座雑色、

太元法御修法結願之、惣庄廿疋・米二斗、神郷廿疋・米

二斗、蘆屋廿疋・米二斗、垣富廿疋・米壹斗、難波米壹

斗、

〔後略〕

〔西宮市史〕四〕

譲与 権上座禪寧

四五六 法印禪慶譲状 筑波大学所蔵北野神社文書

〔筑波大学所蔵文書〕上〕

一、摂津国 西富松支道今西跡

一、丹波国 法音寺沙汰人職

一、近江国 田井郷地頭職

一、山城国 西七条田内田地一町

一、同 国 石垣庄

一、同 国 西七条解繩已下散在田畠屋敷

一、住坊并敷地 但古屋敷在北少路也、

右相副相伝之文書、所譲与也、無他之妨全知行、可被專

天下御祈禱精誠者也、仍為後証龜鏡狀如件、
〔五〇四〕
永正元年七月十八日 法印禪慶〔花押〕

無為無事云々、珍重々々、

〔後略〕

四五七 筒井順賢書狀案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書〔六函一九号〕
〔編纂書〕 乙丑十一月晦日 葉師寺三郎左衛門尉殿 筒井 順賢
長洲庄事

四五九 実隆公記

〔永正三年五月〕
廿一日庚子晴、〔中略〕
松田豊前守来、勸一盞、西園寺知行、摂津国富松庄沽却
事被申請奉書、余知行分除之由載之、其間事等談之者也、
〔後略〕

東大寺法花堂衆被申入候彼堂領之事、理運無紛子細候処、
無謂申掠、乾長寿丸押領候之間、長日勤行并仏前香花・灯
明退転候、以外之儀候、任理運如元被成敗候様ニ御披露可
為御祈禱專一候、恐々謹言、

永正二年乙丑 十一月晦日 筒井 順賢在判

葉師寺三郎左衛門尉殿

四五八 実隆公記

〔永正三年四月〕
廿九日寅陰、〔中略〕

抑西園寺領摂津国富松庄沽却事、被申請奉書、仍三分一
事相除之由可加文章之由、申遣松田豊前守、得其意之由、
今日返事到来、石山還向迎興等遣之、未下刻帰京、路次

富田中務丞殿

四六一 法華堂申狀案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書〔二函二四号〕

四六〇 頭人御加判引付 〔室町幕府引付史料集成〕下
一 摂州河辺郡西富松庄本所分家領、除三条前内大臣 并御厩田壹町号佃
事、西園寺家当知行之地也、然買得云々、任彼売券兩通
之旨、領知不可有相違之由、所被仰下也、仍執達如件、
永正三年五月廿一日 〔松田顯亮〕 豊前守 備一
〔中納言兼〕

〔編纂書〕 申狀の案文

南都東大寺ほつけたう衆言上、

右子細ハ当寺ほつけたう執金剛神領津の国なかつの庄野
地・前田村の事、むかしよりの領知として、長日の御
きたう、たいてんなき処に、彼庄代官職申付候いぬ井と申
者、私領の由 御屋形様へ申かすめ、御下知を申給、彼庄
を一向令押領候、こんこたうたんの次第二候、然間、佛前
の香花灯明あとをたち、こんきやう悉たいてん二及之条、
一衆のなけき朝暮此事也、仍先代かのいぬ井ニ当座の代官
職申付候時のうけ文けいやく状分明二候あんもん御めにか
け候、如此申定ながら、ふ儀□いたすのミならず、堂領
まで押領仕候、前代未聞の子細二候哉、きこしめしひらか
れ、けんてうの御成敗を被成下候ハ、御きたうの専一、各
可忝存者也、仍粗言上如件、 永正三年閏十一月日

四六二 細川家奉行入奉書案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書〔四函三四号〕
南都東大寺法花堂執金剛神領摂州長洲庄内野地・前田村
事、為堂衆中直務之処、近年乾長寿相談押妨云々、太不可
然、所詮於彼公用者、急度致其沙汰、至在所者、向後停違

乱、速可被去渡堂衆中之由候也、仍執達如件、
〔永正三年〕
十二月五日在判

勸学院

○以下、見返しにあり。

南都東大寺法花堂執金剛神領摂州長洲庄内野地・前田村
事、為堂衆中直務之処、近年勸学院相談押妨云々、太不可
然、所詮於彼公用者、不日致其沙汰、至在所者、向後止違
乱、速可被去渡堂衆中之由候也、仍執達如件、
〔永正三年〕
十二月五日 乾長寿

四六三 野地・長洲両莊并前田開発田等所務職補任狀案
京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書〔二函三八号〕

〔編纂書〕 補任之寫、惣左衛門尉方へ遣之 永正二年丁七月廿八日

補任 東大寺法花堂執金剛神領摂州野地・長洲両庄并
前田開発田等所務間事 条々

一 当年年貢毎年百拾貫文、於年内無懈怠可有御沙汰事、
一 毎年於堤修理者、差下上使、可有其沙汰事、

一三ヶ年仁一度之段錢者五十五貫文、春三ヶ月中仁可被致執沙汰事、

一於臨時之段錢者、戒和尚拜堂之時并御堂修理其外一大事之時者、可有執御沙汰事、

一於請切、百十貫文者可為奈良着事、

一天下一同之大損亡抔地之時者、下檢知之上使、可申合事、右条々、^{〔元七〕}嚴密可有其沙汰、雖為少事、未進・懈怠儀在之者、代官職事、早改易可申者也、於無御無沙汰者、惣左衛門尉殿一期之間、可預並申也、仍補任之状如件

永正四年丁卯七月廿八日 東大寺法花堂
堂司大法師行賀

吐田惣左衛門尉殿

四六四 細川家奉行人奉書案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(四函三三号)

^{〔御奉書案文〕}

南都東大寺法花堂領撰州長洲庄并野地・前田村本役等代官職事、被仰付高島与三訖、早年貢・諸公事物以下、如先々可致其沙汰彼代由也、仍執達如件、

永正二年 九月十九日 判

名主百姓中

四六五 細川高国書状案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函七二号)

撰州下郡事申付候、然者如備後守・安芸守時、可存知候、仍与力被官人等知行分并預所職以下之儀、如元可全領知候、恐々謹言

永正五年 四月廿四日 高国在判
薬師寺岩千代丸殿

四六六 寺町通能代官職請文案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(四函六号)

^{〔前欠〕}

煩不可有越年無沙汰事、

一檢断事、如先規可執沙汰申候、但近年断絶候上者、雖為何時御再興儀在之者、不可有如在事、

右条々、若背請文之旨、或抑留年貢、或及無沙汰、或万事於左右对本所令違乱者、被改替彼代官職、同被断公方屋形、嚴密可蒙御罪科、若一粒一錢於不及未進、不背請文旨、南都檢校所着進者、代官通能事、不可有御改動之

儀者也、仍為後日証文状如件、

敬白 天罰起請文事

右子細者、此請文条々、雖為一事一ヶ条、令違犯者、奉始梵天・帝尺・四大天王・三界所有大小神祇、特日本国主天照大神・正八幡大菩薩・春日大明神・大仏三尊・二月堂執金剛神、別而者通能^{〔時名兼〕}之明神等御罰、各於子々孫々可罷蒙者也、仍起請文如件、

永正五年戊辰七月十二日 寺町三郎左衛門尉
通能判

四六七 細川高国安堵状案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函八六号)

当寺領撰州河内郡内長洲庄野地・前田事、任先々下知之旨、当知行不可有相違候、弥可被全領知之状如件、

永正五年七月廿四日

在判

東大寺
法花堂衆僧中

四六八 細川高国安堵状写

東大寺中性院襖下張文書

〔南都佛教』一〇二〕

^{〔御奉書〕}
「東大寺法華堂証文安文『細川』高国之御判也」

当寺領撰州河内郡内長洲庄野地・前田事、任先々下知之旨、当知行不可有相違候、弥可被全領知之状如件、

永正五年七月廿四日

右京兆高国御判也
御判

東大寺法華堂衆僧中

四六九 細川高国奉行人飯尾秀兼奉書

東大寺中性院襖下張文書(『南都佛教』一〇二)

南都東大寺法花堂執金剛神領撰津国河内郡長洲庄野地・前田公用事、雖為乾勸学院使取次之、七ヶ年之間依無沙汰可令直務之旨、任大心院殿度々御下知之旨、弥可被全寺務之段被成奉書上者、可存知之由候也、仍状如件、

永正五年 〔後欠〕

一 一秀兼(花押)

四七〇 薬師寺国盛長洲庄代官職請文案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(二函三七号)

^{〔御奉書〕}
「薬師寺岩千代丸請状」

請文 東大寺執金剛神領撰津国長洲庄御代官職事

一年貢錢者毎年請口定百貫文、

一堤修理料者每度申請上使可申付事、
一三ヶ年仁一度之段錢者伍拾五五貫文、春三ヶ月中仁可致
執沙汰事、

一於臨時之段錢者、戒和尚拜堂之時并□堂修理其外一大事
之時者、可執沙汰事、

一為請切之地上者、旱水風損不可申、雖然大洪水・高塩・
大風等、一段大損亡之年者申請上使、以所務有姿可申合
事、

一年貢錢少事毛越年未進不可申事、

右条々、堅契約申旨、更以聊不可有□違候、若雖為少
事未進又□不法之儀在之者、御代官職事、可被及御改易、
其時一言子細不可申候、仍為□□請文状如件、

永正□年^(五)戊辰八月三日

葉師寺 岩千代丸

法花堂□僧御中

四七一 某書状土代

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(二函一八号)

当堂領撰州長洲庄事、永正五年以前、自勸学院依^(依上意申據)上意申
掠、及三問三答事、^(二)高^(三)度御座候、然処^(三)去年又申掠、所務
之内半分可取由、被仰出候哉、既直務之通、数年御成敗之

処^(三)、一方向御下知歎存候、先之如御成敗、可被直務之通
島山式^(順也)少輔殿被仰届候者、畏可存之旨、御披露奉頼候、如
前々御奉書、為御披見進覽候、

参姜湯

茯苓 人三^(參) 半□^(皮カ) 五味子 細辛

干姜 桔梗 丁香皮 各等分

石每服 生姜二片 棗一

○永正五年以後のため、しばらくここに収める。

四七二 太田保寛等連署奉書写

撰津国領所事記(『北野社家日記』八)

折紙也、
一、北野社領撰州西富松内支道今西跡段錢事、為先々免除
之地上者、早可止催促之由被仰出候、恐々謹言、

永正六 十二月九日

波々伯部兵庫助 元教判

太田蔵人 保寛

葉師寺岩千代丸殿

当代石田四郎兵衛方へ、以足立加賀入道遣之、

四七三 法華堂条々申状案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(六函二七号)

案^(備置) 乾勸方与自問答公方様江申状 永正六年^(巳)十一月日

御披露候、恐々謹言、十月廿三日 祐春

齋藤上野介殿

猶々被起請文等、備不候訖、具御披露肝□□

□法花堂領撰州長洲野地・前田開発□□

先度致言上候之処、勸学院支言上通、不能覚悟候、

一彼庄根元事并一編常在光寺知行事、只今就堂衆与勸学院
与問答、更無其益候上者、不□□非候、

一曆応三年^(三)带御下知等、乾為預所職相論云々、先度如致
言上候、以起請文等為代官職再知□□候、如然乍致誓
約、公用無沙汰仕候条、任起請文言、代官職可改易段、
勿論候哉、

一明応元年、葉師寺長盛、乾申談相論在所時、依損免請口
減少間、及問答云々、猶以無沙汰、於覚悟候、於在所之
土貢者、雖過分之儀候、為請切、乾致堂納候上者、号損
免及難涉之事、奸謀至極候、

一澤蔵軒^(赤沢朝徳)申談事者、勸学院公用を乍致無沙汰、尚貪堂領
之条、既執金剛神仏供灯明忽令断絶間、各歎存相憑沢蔵
軒、退勸学院押妨候訖、是又堂衆等非造意候、偏依勸学
院悪行之儀候、

一澤蔵軒没落以後、又勸学院令押領、於公用一粒不能堂
納候之間、細川六郎殿申談、退彼遣乱候、惣別或守護
或武辺儀を相憑候事、雖千万迷惑候、依勸学院極悪、及

当堂断絶候事、歎存候条、如然廻調法候者、致堂納候、

一御帰洛以後、毎々御成敗嚴重間、寺社各奉成安堵思候、

肝要者可全直務之由被成下 御下知、可奉抽御祈祷之丹

精候、

一去年勸学院掠給 御下知候以来、彼構猛悪、一粒不能

納所候条、具慮猶以歎測存候間、先度致言上処、勸学
院種々及雖陳答候、併奉輕公儀候哉、言語道断子細候、

条々於堂衆等無越度通、宜仰、

四七四 一休宗純三十三回忌出錢帳

大徳寺真珠庵文書(『兵庫県史』史料編中世七)

永正七年三月

御影三十三回忌納下帳

出錢帳

取越帳也、

三十三回忌出錢帳

卅三回忌之出錢帳

壹貫文 床菜庵 壹貫文 禅玄庵

〔中略〕
百文 宗春 北海取次 宗鏡

〔中略〕
百文 道松 美濃入道 紹棠

〔中略〕
弍百文 蕙薰 同 参百文 性春
同 宗宝 同 参百文 宗寿
同 慈泉 同 参百文 慈椿
同 慈棟 同 百文 慈久
同 慈德 同 百文 慈印

〔前巻〕
過去 〔已上六拾弍貫八百弍文〕

〔中略〕
弍百文 宗仙 百文 蕙琢
〔中略〕

〔前巻〕
〔五十貫文、自越前上ル、出錢ノ
下行ノ残〕
〔前巻〕
〔并四百廿八貫四百四十二文〕
奉行 宗籍(花押)
奉行 宗恩(花押)
永正七年 三月廿一日

院主 宗琨(花押)
紹越(花押)

四七五 室町幕府奉行人連署奉書

東大寺法華堂文書(『兵庫県史』史料編中世五)

〔編纂書〕
〔辛未〕
南都東大寺法華堂領摂州長洲庄野地・前田開發等事、去天
平年中 勅施入以來、嚴重堂領也、爰乾長寿先祖就有子
細、致代官、公用無沙汰之条、可令直務之旨、雖敷申之、
乾如支申者、於彼公用者、自先々参分壹執沙汰云々、為糺
明、被訪意見之処、三分壹寺納之段、証拠不分明、所詮、
被折中之上者、年々所出年貢半分宛可全堂納之旨、被成奉
書訖、宜存知之由、所被仰出之状之状如件、
永正八
四月廿四日

尼崎番頭中

四七六 室町幕府奉行人連署奉書案

東大寺法華堂文書(『兵庫県史』史料編中世五)

南都東大寺法華堂衆申摂州長洲庄年貢事、被折中、国請半

分宛、可取沙汰旨、对乾代勸学院、被成奉書処、至段錢

等、既難渋之間、雖令催促、不及返答云々、所詮、国請半
分宛、可被堂納之由、被仰出候也、仍執達如件、
永正八
十一月廿八日

伊丹殿

四七七 室町幕府奉行人連署奉書案

東大寺法華堂文書(『兵庫県史』史料編中世五)

南都東大寺法華堂衆申摂州長洲庄年貢事、半分宛、速可令
堂納之旨、被成奉書処、勸学院不及其沙汰云々、以外之次
第也、所詮、年貢并段錢等半分宛、直可致堂納之由、被
仰出候也、仍執達如件、
永正八
十一月廿八日

寺町三郎左衛門殿

四七八 長洲莊野地・前田算用状

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(六函七号)

〔前巻書〕
〔永正九〕

摂州野地・前田算用状之事

合七拾貫文内

八貫百文 毎年堤入目半分定

貳貫貳百文 東野堤足半分定

貳拾参貫参百卅貳文 守護役分

参拾貫文 当損免半分定

以上六拾参貫六百卅貳文

残六貫参百六十五文内

参貫百八十参文

参貫百八十参文

永正八年十二月 日 通能(花押)

南都法花堂衆

四七九 細川政賢書状

実隆百首并後成恩寺殿三十三回忌

追善一品経和歌紙背文書

〔国立歴史民俗博物館研究報告〕一七〇

富松四郎左衛門尉与知行分摂州小屋野庄内清包相論之事

急度一途之様、預申沙汰候者、可為本望候、委曲赤沢加賀

守・小河式部丞可申候、恐々謹言、

七月廿八日
松田豊前守殿

政賢（花押）

○細川政賢は永正八年に死去するため、しばらくここに収める。

四八〇 室町幕府奉行人連署奉書案

東大寺法華堂文書（『兵庫県史』史料編中世五）

〔永正九年壬申三月日〕

寺町方ニ重而御奉書案

南都東大寺法花堂執金剛神領摂州長洲庄事、為勸学院、半分宛可堂納旨、御成敗候処、段銭以下令無沙汰間、可被直納段、去年十一月雖被成 奉書、彼院不請取、剩押置年貢云々、上意蔑如之儀、以外次第也、於狼籍段者、可被遂糺明、先至押置年貢半分者、速可被渡付堂衆、不可有遲怠之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正九年

三月七日

基雄在判
貞兼在判

寺町三郎右衛門尉殿

四八一 舟屋法眼元惠書状

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書（四函五七号）

尚々必々明日八日ニ源三郎まで御下あるへく候、
国にて紛可申候、先日牛玉六枚見出候、

急度注進申候、此間上野殿依在国失方角候つる、以伊勢兵庫殿色々内奏仕候へ共、御沙汰無御座候間、無由打過候後、折紙銭不可入候と存候、

一 此間条々、齋藤美乃殿ニ侘申候、さ候間、今月五日ニ申入候、心得候へく候、則披露被申候、御下知等可被書出儀候、相判以下之ゆい言にて置候、今月七日辰刻時分ニ可被書出候、寺町三郎さ衛門方へ斗へ可付申覚悟候、

一 明日八日ニ源三郎を差遣候、津の国へ可有御下候、拙者も明日八日ニ罷立、尼崎まで可付申候、

一 三郎さ衛門申事ニハ今一度御下知、早出候ハんする方へ渡可申由、下向之前ニ申おき被下候、此間色々之の辛勞、可在御推量候、

一 美乃殿ニ二百疋折紙仕候、兵庫助殿のハすたりまいらせ候、問答者野依右京亮方も可為同辺候、

一 御下知■申事にてハ重可有糺明分、被仰出候、此方之為ニハ吉事にて候、

一 必明日八日ニ源三郎可有御下候、

一 此分御状御調と可有候、当堂奉行上野介殿、依在国、失

方角候間、奉頼申入候、仍撰津国長洲庄法花堂領、勸学院依押方、近年不知行候、為御折中、半分可被堂納由、雖御成敗候、以猶無沙汰候間、半分可有直納由、被仰出候、結句御下知不請付返申候、則申状一通進上候、急度可然様御披露奉頼候、恐々謹言、

三月五日

法花堂衆

齋藤美乃守殿

一 申状をハ拙者相調、既披露申候、如此御状一通可給候、上野介殿上落之時、いたすの用にて候由被申候、

一 飯尾近江守殿ハ既勸方の奉行を斟酌之由さた候内儀、拙者色々侘事申候、子細共ニ申上候歟、恐々謹言、

〔永正九年〕

元惠（花押）

東大寺
コンカウキ
祐春房まいる

四八二 舟屋法眼元惠・源三郎連署書状

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書（八函四五号）

〔永正九年〕
祐春 申候

舟屋法眼

元惠

二貫文 齋藤美乃守殿^(通徳)へ契約ニ可被遣候、
一貫五百文 伊勢兵庫殿并野依殿へ礼内五百文にて候、
人を御上候て此分可有御支配候哉、残五百文をハ令迷惑仕
候間、拙者ニ可被下候哉、可得御意候べく候、恐々謹言、
^(永正九年)
七月廿一日 舟屋法眼(花押)

祐春房まいる 証文事、委細御使ニ申合候、

四八四 舟屋元恵書状

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(八函二八号)
拙者不弁無申斗候、

先度注進状給候間、此向於京都寺町三郎^(通徳)さ衛門方と
色々調法申候、雖然勸学院へ御奉書給候ハす候間、直務
事不及覚悟と申候間、勸公一行候ハ、可給由候間、御奉
書此者ニ進候、一日ニ五度も十度も人を御遣候て申様、
可有御注進候、

一わり^(御符)ふ給候つれ共、寺町方如此申候間、津の国へ人をハ
下候ハす候、

一此奉書去年可進候を奉行所ニ被取落候、只今進入候、
一日二日逗留候共、勸学院返事一通可承候、彼依申様、
皆直務ニ成事もあるべく候、

一別源三郎且納所も取上候ハ、五百三百なり共、此者ニ
給候ハ、悦喜可申候、
一上野殿も半退帰候へく候、奉行を^(辭退)したいすへきなんと、
被申候、色々拙者申如調候、

一万其方之儀、示給候ハ、悦喜可申候、暮々勸学院返事一
通御聞候て、此者上可給候、恐々謹言

正月廿日 (花押)

祐春御坊中 舟屋法眼

○紙面上部に「終」の一字あり。

○舟屋元恵が見えるため、しばらくここに収める。

四八五 舟屋法眼元恵書状

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(八函四七号)

御儀飯尾江近殿^(マ)申入候事をハふかく可有御隠密候、

御公事子細、此間度々齋藤上野殿^(兩志)罷出申合候、聊無疎意
候、旧冬奉行意見状ニハ、所務半分被出、両方共ニ可有堪
忍由、意見被申候、未上意ハ無披露之儀候、委細をハ藤
全・岡殿ニ申入候、可有演談候、冬之状ニ御さた候て、申
状可申候、同者連署可然由候、彼勸学院悪行至猛悪、言語

道断之由、無斟酌悉被達 上聞者、可属御本意候、飯尾江
近殿へ大体物語共申候、大事之御公事にてこそ候へ、暮々
私申処とハ可有御隠密候へく候、恐々謹言、

正月廿四日 元恵(花押)

○舟屋元恵が見えるため、しばらくここに収める。

四八六 北河原栄盛書状

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(四函一九号)

猶々去年分之儀付候てハ、条々申事共候、更不可有如
在候、

御返事通委細令拜見候、就中御公用半分儀付御算用之儀、
寺町三郎左衛門方より可被申候、先以拾貫文、船屋法眼方
へ渡申候、去年事ハ以外候、風水損之条、過分御損免、行
事候間、可被御心得成候、子細追而御算用状上、以可令申
候、恐惶謹言、

三月十五日 北河原美作守 栄盛(花押)

法花堂衆御中参
人々御中

○舟屋元恵が見えるため、しばらくここに収める。

四八七 北河原景盛書状

一別源三郎且納所も取上候ハ、五百三百なり共、此者ニ
給候ハ、悦喜可申候、
一上野殿も半退帰候へく候、奉行を^(辭退)したいすへきなんと、
被申候、色々拙者申如調候、

一万其方之儀、示給候ハ、悦喜可申候、暮々勸学院返事一
通御聞候て、此者上可給候、恐々謹言

正月廿日 (花押)

祐春御坊中 舟屋法眼

○紙面上部に「終」の一字あり。

○舟屋元恵が見えるため、しばらくここに収める。

四八八 法華堂衆申状土代

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(四函九四号)

御儀飯尾江近殿^(マ)申入候事をハふかく可有御隠密候、

御公事子細、此間度々齋藤上野殿^(兩志)罷出申合候、聊無疎意
候、旧冬奉行意見状ニハ、所務半分被出、両方共ニ可有堪
忍由、意見被申候、未上意ハ無披露之儀候、委細をハ藤
全・岡殿ニ申入候、可有演談候、冬之状ニ御さた候て、申
状可申候、同者連署可然由候、彼勸学院悪行至猛悪、言語

猶々冬春中罷上候て、旁々御礼可令申候、御さん用
儀、心得申候、目出重而可申上候、

如御定年甫吉慶、千秋万賀無之重畳、被任御意候条、猶以
御満足、弥々不可有際限候、就中此方大切すミ三丁被下
候、一段祝着無極令存候、為御祝言五明一本令進上候、千
秋万歳候、将又御公用さん用事、去年之儀ハ以外水損之儀
条、御百姓等一段損免之儀申、於今ニ無一途候、必々可在
候ハんする間、きと從寺町殿^(兩志)さん用とけ可被申候、御定
旨、寺町殿江可致披露候、恐惶謹言、

正月廿五日 景盛(花押)

法花堂御衆参御同宿中

○北河原景盛が見えるため、しばらくここに収める。

四八八 法華堂衆申状土代

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(四函九四号)

(前欠)

右子細者、聖武天皇忽起菩薩^(大願)。奉鑄十六丈金容、即天平
五年勅良弁僧^(正)。立金剛寺、大佛建立御願成就之事ヲ祈精シ
給、今此法華堂是也、天皇当四十賀観音・同執金剛神安

置、尊像為王城鎮守向北方御座入、花嚴別供為寄附、任天道奇瑞。造大形、在所○浮川ノ流、此荷着。○永代可為堂領御祈念処。長洲之浦ニ止也、自然以來、守護為不入地一円知行無相違処ニ、号守護役三分一御収納条、満堂驚歎此事也。於放大心願御他無其煩○殊此執金剛神者、將門誅罰時、成大峰、入甲、天刃指、害給、則為天下和平、為仏法弘道国土、爰勸学院惡僧申掠上意、多年依押領、長日天下御祈禱仏供灯明等、既為退伝愁猶愁、歎猶歎アル者哉、殊聖武天皇御震筆金剛銘曰、吾寺興復ハ天下興復セン、吾寺衰弊セハ天下も衰弊セン、治国之運者、從此寺初ルト云々、誠一字御建立者。○天下静謐■之基間、於守役者一向預御寄進者、弥御武運長久、可抽懇祈旨、仍粒言上如件、

永正九年九月 日

四八九 細川高国奉行入齋藤貞船奉書写

彰考館所藏北河原森本文書(『兵庫県史』史料編中世九)撰津国橋御蘭内大路村下司・公文職事、為本領之間、以御成敗、所被知行也、殊彼而職事者、為上意不被仰出之上者、弥粒知不可有相違之由候也、仍執達如件、
永正十年三月十日 貞船(花押)

四九〇 東大寺勸學院雜掌申狀案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函九五号)「勸學院初問」
東大寺勸學院雜掌謹言上

右子細者、撰州長洲庄所出之事、為折中、寺納之半分、法花堂衆方江可令下行之由、先度被□下御下知之間、謹致堪忍之處、剩徒国代官方ハ直ニ可令堂納由、猶申賜御下知之条、言語道斷、驚存者也、仰当庄知行之根元、如令度々啓上、被成下等持院殿様御判御下知已来、無他之遺乱妨、存知之證文并所出三分一分明之證跡等、永正八四月廿四日御紀明之刻、備上覽、既以被聞食披之由、被仰下上者、任先規年貢・段錢等可所出之由、被成下御下知者、可忝畏存候由、去年捧御狀之處ニ齋藤上野介在国之間、可抽得上洛通、依被仰出于今延引早、所詮如先規三分一可所出之旨、速被成下御下知者、弥可奉抽天下安全懇祈者也、仍粗言上如件、

永正十年九月 日

四九一 法華堂雜掌申狀土代

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函五二号)「由来長洲庄之事之言上」
「下書等也」

東大寺法花堂雜掌謹言上

右子細者、法花堂執金剛神領撰州長洲庄事、先年巨細如申上候、彼庄請□數ヶ年、無謂依令押領、代官之事召放候処、猶以令抑留、最初乾致存知代官候時、神領之証文共數通乞請、于今所持仕、以彼支証、勸学院種々依申掠、去○年既為御折中、寺納半分之通、法花堂江可致知行之由、被成下御下知候条、千万雖迷惑仕候、御成敗之上者、不能是非無力御請申進候処、当年又立帰上意於令違背、三分一可致下行○之由、申合之条、狼藉之至極。○言語道斷之次第也、殊彼庄事、為嚴重之神領処、一旦乍致代官、如私領被申掠候条、前代未聞所行也、所詮被退傍若無人之族、被代官之事、速ニ被召放、可致直務■、被違上聞者、執金剛神仏供・灯明等無退転、可致専天下泰平御祈禱者也、仍粗言上如件、

永正十年十一月十五日

四九二 法華堂衆重申狀案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(四函三七号)「嘉永七寅年 弘準修理之了」
「法華堂衆ニ答状 永正十一年廿五」

東大寺法華堂衆重支謹言上

右、就当庄之儀、等持院殿様对御判御下知云々、言語道斷次第也、度々如令啓上、代官於依申付当堂為雜掌御下知於申請、于今本所江不返而对証文由申上事、且以代官非証拠者也、一彼庄為所出分三分一沙汰仕候由申掠候條、以外次第也、乍致神領之代官、所出分与申子細、何事候哉、至于此等恣申狀、慮外至極也、殊於請取皆濟之無二字事、与寺法云々、於当堂者皆濟者与皆濟書出、且分者且分与出事勿論也、雖对請取於更不可及支証者也、一年貢多少相論何故乎、故乾七ヶ年間一向依令押領、守護方江訴、代官於召放、致直務候畢、然上者不法之人、而今又立帰、令言上事、不及覺語候也、
從永正五年至三ヶ年、為乾代勸學院上意於申掠、一向押領仕畢、然間上件子細依申上、為御折中、半分可致堂納之由、被仰出問、雖及迷惑候、堪忍仕候処、致越訴

事、当堂幸此時候、被 聞召開御成敗、可為肝要者也、

一 永正八年十一月廿八日年貢段錢等一円令無沙汰間、可致直納段、被成下 御奉書処仁、御下知於不請取、御奉書於投返事、至狼藉緩怠、惡逆無道之人、不可過之者也、上意蔑如之段、重可被加 御下知之由、齊藤美濃守仁被仰付、寺町方江被成 御下知早、同 御下知之通書寫、奉備 上覽者也、

一 往古者請料百拾貫文処仁、不伺本所江勸學院為一人計、四千疋、国代官江指置云々、至惡行之、伽藍破滅之源也、剩残七千疋之内二千疋余、号守護役其外無例引物等、恣之依為所行、年貢事為有名無実者也、依之仏供灯明・長日天下御祈禱等、悉以令退転者也、愁猶愁歎猶歎者歟、所詮被聞召分、彼被退勸學院、可致直務、被成下 御下知者、仏法紹隆之起一字御再興始、何事如之哉、然者弥御貴運長久、天下安全、可抽御祈禱精誠者也、仍粗言上如件、

永正十年十一月廿七日

四九三 法華堂衆重申狀案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函九四号)

一 往古者請料百十貫文処仁、不伺本所江、歎學院為一人計、四千疋国代官江指置云々、至惡行之、伽藍破滅之源也、剩残七千疋之内二千疋余、号守護役其外、無例引物等、恣之依為所行年貢事、為有名無実者也、依之仏供灯明、長日天下御祈禱等、悉以令退転者也、愁猶愁歎猶可歎者歟、所詮被聞召分、彼被退勸學院、可致直務、被成下 御下知者、供法紹隆、起一字御再興始、何事如之哉、然者弥御貴運長久・天下安全可抽御祈禱精誠者也、仍粗言上如件、

永正十年十一月廿七日

四九四 法華堂雜掌重申狀案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函五八号)

一 往古者請料百十貫文処仁、不伺本所江、歎學院為一人計、四千疋国代官江指置云々、至惡行之、伽藍破滅之源也、剩残七千疋之内二千疋余、号守護役其外、無例引物等、恣之依為所行年貢事、為有名無実者也、依之仏供灯明、長日天下御祈禱等、悉以令退転者也、愁猶愁歎猶可歎者歟、所詮被聞召分、彼被退勸學院、可致直務、被成下 御下知者、供法紹隆、起一字御再興始、何事如之哉、然者弥御貴運長久・天下安全可抽御祈禱精誠者也、仍粗言上如件、

右就当庄之儀、〔定和專氏〕等持院殿様对御判御下知云々、言語道断次第也、度々如令啓上、代官於依申付当堂為雜掌 御下知於申請、于今本所江不返□对証文之由申上事、且以代官非証拠者也、

一 彼庄為所出分三分一沙汰候由申掠候條、以外次第也、乍致神領之代官所出分与申子細何事候哉、至于此等恣申狀慮外至極也、殊於請取皆濟之無二字事、与寺法云々、於当堂者皆濟者与皆濟書出、且分者且与出事勿論也、雖对請取於更不可成支証者也、

一年貢多少相論何故乎、故乾七ヶ年間一向依令押領、守護方江訴代官於召放、致直務候早、然上者、不法人而今又立帰令言上事、不及覺語候也、

一 自永正五年至三ヶ年為乾代勸學院 上意於申掠一向押領仕畢、然間上件子細依申上為御折中半分可致堂納之由、被仰出間、雖及迷惑候勘忍仕候処、致越訴事、当堂幸此時候、被聞召開御成敗、可為肝要者也、

一 永正八年十一月廿八日年貢段錢等一円令無沙汰間、可致直務段、被成下 御奉書処仁御下知於不請取、御奉書於

院宣等分明之上者、於知行之形、善惡所憚無之歟、況於

上意嚴重御成敗哉、堂衆者飽持道理、謹心 上意候処、一向称虚言、投返 御奉書、押置於所務、種々違背 上意、欲令滅亡伽藍、僧衆之体、有御許容、而猶被相向月日之所敵候事、返々不便次第候、如此候時者、与心 上意、与違背 上意、勸賞治罰蓋異無之、満堂諸衆帶院宣、仰 上裁、蒙本主名候事共、更無其曲候、抑一人猛惡不当之働而成一堂三宝之煩、令退転灯明勤行等、忽朽失堂方諸衆候事、言語道断之惡行候哉、道理之是非、凡先可有御推察候歟、又就御成敗之儀、令難涉、剩押所務等之所行次第、非雅意哉、然而被種々所掠申、不被及御糺明、於被押籠者開眉事、頼誰可期何日候哉、仍偏弥奉仰、尽理 御成敗候也、

一 雜掌之名立之候事各候、此條不弁事意候歟、諸公事申沙汰候条、雜掌与申候、又致於本主之代官者号預所候、何事限雜掌之名、忌嫌候哉、不審候、但非預所代官等仁義之由申候歟、至其段者不知候、況乾請文之面仁自称雜掌職候、此言如何、可陳候哉、尤可被尋聞食候、抑代官者蒙本主之恩賜之間、縱雖為貴種、身居代官候時者、对下輩尽恩言之礼儀事候、仍告之乾者其儀候、代々請文更

不疎候、今申事、背先代之礼儀候条、更不得其心候、所詮依無別而可申立之理、懸于無用之事、不謂之子細、費詞候哉、不便之次第候、

一 皆済并且之言事、被任通法・道理之行所、御成敗更無余儀候、寺門之捉法、只可為其旨候、然而為寺門之捉オキテ、シテ、更不書載於皆済之詞之由、被申事更未承及者也、一本請文三分一与云々、於当堂曾以不存子細也、

一 七ヶ年間令押領事一大事、神領非可棄置儀之間、蒙大心院殿御成敗、致直務処也、証文在之、

一 自永正五年三ヶ年一向乍致押領、令陳申言仁、雖可堂納不請取云々、是又虚言也、於当堂更不存子細也、

一 乍致代官、对本所号押妨事、倒言太有興申事也、每篇以之、可有御案欺、

一 相語澤藏軒・高島与三、三千疋減少云々、以外虚言也、其謂者、故乾為沙汰用途千疋、守護代安芸守(兼御寺)二閣之、從尔以来、安芸守与乾令同意、押而百貫文沙汰之、仍文キ■
龜年中送状備之、

一 寺町三郎左衛門尉預初百十貫文、今又請口七十貫文云々、是又誰所行哉、剩從当堂減少云々、如此公方虚言非一、称奉令輕 上意之条、罪科争遁哉、堅可有御礼明、

一 对当堂代々乾既若有不忠子細者、於代官可被召放之由、請文分明也、然時者、只今可令改贄事(替也)、争可非道理乎、况 院宣文言歷然者哉、

右、此等条々、堅彼種々虚言・無尽之所行、有御礼明而堂方理運旨、不日被仰付、致直務者、滿堂衆等弥可奉抽於天下安全、殊 御運万歳・御願成就之懇折候、仍重言上如件、

永正十年十一月 日

四九五 室町幕府奉行人連署奉書案

東大寺法華堂文書〈『兵庫県史』史料編中世五〉

南都東大寺法花堂執金剛神領撰州長洲庄野地・前田開発等事、去々年以折中之儀、雖有御成敗、代官乾代勸学院、所納年貢内三分壹可堂納段、今度重捧証文并当堂請取状等、猶依申子細、御礼明之処、三分壹堂納之証跡不分明、至堂衆出帶之証文者、院宣并乾先祖或載起請之詞、或对当堂致不忠者、可被改彼雜掌職之旨、嚴重之請文炳焉之上者、被召放乾代官職訖者、早一円可被全直務之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正拾年十二月廿五日

(兼雜侍卷)
上野介在判

(飯尾之卷)
下野守在判

当堂雜掌

四九六 室町幕府奉行人連署奉書案

東大寺法華堂文書〈『兵庫県史』史料編中世五〉

南都東大寺法花堂衆申当堂執金剛神領撰州長洲庄野地・前田開発等事、去々年以折中之儀、御成敗之処、今度重所納年貢内三分壹可堂納段、捧証文并当堂請取状等、代官乾代勸学院雖申子細、三分壹堂納之証跡不分明、至堂衆出帶証文者、院宣并乾先祖嚴重之請文等炳焉之上者、可令直納之旨、被成御下知訖、宜被存知之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正拾年十二月廿五日

(兼雜侍卷)
上野介在判
(飯尾之卷)
下野守在判

当寺別当僧正御坊

四九七 法華堂衆書狀案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函七九号)

(備前寺)
寺町三郎左衛門尉披露状之案文

就撰州長洲庄之儀、以事書令申候、此等趣、可然様急度預

御披露候者、可為畏悅拜言候、

恐惶謹言、

永正一年

三月廿一日

法花堂衆

寺町三郎左衛門尉殿

四九八 長洲莊野地・前田每年算用状包紙

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(七函六四号)

長洲庄野地・前田

每年算用状

永正十一年甲戌五月日

四九九 法華堂雜掌重申状案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函一二号)

(備前寺)
堂方

東大寺法花堂雜掌重謹言上

□子細者、忝聖武天皇大仏殿為造立祈念成就、先立此御堂給、天平勝宝以来、勅施入事旧訖、御一代被召放、被寄東山常在光院料所云々、於□堂一切不知沙汰子細者也、□二年、頼惠僧正法花堂江御寄附云々、此段於当堂□存子細也、於当堂御寄附者、建長八年八月十八日、

別当良惠權僧正御寄附之証文在之、同永仁六年九月七日

御院宣等在之、太有輿申事也、何毛年代□^{〔〕}違被申事、

於當堂不及覺悟子細也、□^{〔〕}貢三分一可渡云々、自昔三分一不可有支証者也、

一元德年中仁、他方之請狀令出帶申掠云々、是又親之曲事

候、自曆応三年、乾方預所相拘之由申上者、於請文者、無余儀者也、仍彼請文面云、对堂方致不□同請口之年

貢、令無沙汰者、速可被召放、其時不可及于一言子細二旨、誓言分明也、

一不及 御糺明一方向、被成御下知云々、是又第一虚言也、

於堂衆者、御折中雖非本意、謹相待時節処、去年勸学院令越訴事、堂方幸得渡海船、如挑暗夜灯、何一方向可謂御成敗哉、

一有限所出分、依無懈怠古今請取在之云々、故乾七ヶ年一向無沙汰間、故細川右京兆三訴申召放、致直務者也、今

度又永正五六七三ヶ年間申掠、一向無沙汰、押領仕候、猛惡至非一、只有人口不能一二者也、

右条々被聞召分者、□天長地久、万民快樂、可抽精誠者也、仍粗謹言上如件、

永正十一年七月 日

五〇〇 法華堂衆申状案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(二函四四号)

〔編纂書〕 永正十一年十二月日細川殿へノ申状ノ案文

東大寺法花堂衆評議曰、

右子細者、聖武天皇忽起菩薩大願、奉鑄十六丈金容、即

天平五年勅良弁僧正、立金鐘寺、大仏建立御願成就事、祈精給、今此法花堂是也、天皇当四十御賀、○安観音・執

金剛神等尊像、為王城鎮守、向北方御座、花嚴別供為寄附、任天道奇瑞、造人形浮川流、此落着在所、永代可為堂

領之由、御祈念処ニ長洲之浦留也、自然以来、為守護不入

之地、一円知行無相違処ニ、号守護役三分一御所納之条、滿堂驚歎此事也、於故大心院殿御代、終無其儀、凡此執金

剛神者、將門誅罰之時、成大峰、入甲、天辺損害給、則天

下 和平而、仏法弘通成事、新不能述之、爰勸学院申掠 上

意、多年依押領、長日天下御祈禱、仏供灯明等、既令退転、愁猶有愁、歎猶有歎者哉、殊 聖武天皇御宸筆金銅銘

曰、○寺興復天下興復、吾寺衰弊天下毛衰弊、治国運者、從此寺初云々、誠一字御建立者、可為天下靜謐基間、於守

護役者、一向預御寄進者、弥御武運長久、可抽懇祈旨、仍粗言上如件、

永正十一年十二月廿三日

〔裏書〕

南都東大寺法華堂衆評議曰、

右子細者、聖武天皇忽起菩薩大願、奉鑄十六丈金容、即天

平五年勅良弁僧正、立金鐘寺、大仏建立御願成就事、祈精給、今此法花堂是也、天皇当四十賀、観音・同執金剛神、

安置尊像、為王城鎮守、向北方御座、花嚴別供為寄附、任天道奇瑞、造人形浮川流、此落着在所、永代可為堂領御祈

念処、長洲之浦留也、自然以来、守護為不入之地、一円知行無相違処、号守護役三分一御所納之条、滿堂驚歎此事

也、於故大心院殿御代、終無其項、殊此執金剛神者、將門誅罰之時、成大峰入甲、天辺損害給、則天下和平、為仏法

弘通国土、爰勸学院申掠 上意、多年依押領、長日天下御祈禱、仏供灯明等、既令退轉、愁猶有愁、歎猶有歎者哉、

殊 聖武天皇御宸筆金銅銘曰、吾寺興復天下興復、吾寺衰弊天下毛衰弊云々、治国運者、從此寺初云々、誠一字御

建立者、可為天下靜謐基間、於守護役者、一向預御寄進者、弥御武運長久、可抽懇祈旨、仍粗言上如件、

永正十一年十二月 日

○本文書、墨線にて全文打消。

五〇一 真如堂所領目錄

真正極楽寺文書(『兵庫県史』史料編中世九)

真如堂領諸国所々目錄

一大和国河合長原庄之内御堂田之事、

田島九町八段大 安居院禪尼專念、永仁三季二寄進月十五日

一撰津国橘御園柳津庄内光貞名燈油田事、

安嘉門院慈心 □永元季十二月廿七日御寄進之

(中略)

但施主赤沢加賀守

已上

永正拾貳季乙十二月 日

五〇二 東大寺乾長寿申状案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函八八一号)

東大寺乾長寿謹言上

右、撰州猪名庄内長洲・野地・前田開発預所職事、可令直務之由、先年彼堂衆等歎申条、從往古為三分壹所出之趣、

雖令言上、被折中之段、被成御下知訖、其後重而申上之処、堂衆等掠申歎、一円被付置之條、歎猶有余者哉、所詮

致有限所納、至下地如先々可令全領知之旨、被成下御下知

者忝存、弥可奉抽天下泰平・貴運長久之御祈祷者也、仍粗言上如件、

永正十四年六月日

五〇三 東大寺乾長壽申状案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函九三号)

〔編纂書〕七月七日ニウツサレ了

東大寺乾長壽謹言上
右、摂州猪名庄内長洲・野地・前田開発預所職事、可令直務之由、先年彼堂衆等歎申条、從往古為三分壹所出之趣、雖令言上、被折中之段、被成御下知訖、其後重而申上之処、堂衆等掠申也、一円被付置之條、歎猶有余者哉、所詮致有限所〇職、至下地如先々可令全領知之旨、被成下御下知者忝存、弥可奉抽天下泰平・貴運長久之御祈祷者也、仍粗言上如件、

永正十四年六月 日

五〇四 東大寺乾長壽申状案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函八八―二号)

〔編纂書〕永正十四丁丑七月廿一日ウツス

二問 乾方長壽

東大寺乾長壽謹二問言上

右、摂州猪名庄内長洲・野地・前田開発預所職之事、法華堂衆等支言上之旨、永正八之三問三答御糺明之時、堂衆等申掠条々事旧訖、為一事只今無別儀上者不能事、新子細言上申者也、所詮任 等持院殿樣已来 御判御下知之旨、如先々可令全領知之旨、被成下 御下知者忝存、弥可奉抽天下泰平・ 御貴運長久之御祈祷者也、仍粗言上如件、

永正十四年七月 日

廿一日未剋ニ書〇

五〇五 南都東大寺法花堂証文目錄

東大寺中性院樓下張文書〔『南都佛教』一〇一〕

〔編纂書〕南都東大寺法花堂証文目錄事

合

院宣

一通

別当寄進状

一通

一乾請状

二通

〔編纂書〕右京兆繼目判

一通

〔編纂書〕延応元年別当寄進状

一通

御奉書

四通

〔編纂書〕永正十四 已上十通在之、

七月廿日

〔編纂書〕南都東大寺法花堂

五〇六 法華堂衆陳状土代

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函九六号)

〔編纂書〕熱命神下子ウツ冠今度ノ八不入、東大寺法華堂衆支謹言上

右法花堂〇領摂州長洲野地・前田開発等事、御寄附以來

數百年為直務地、知行無相違也、于爰乾賢幸預所職競望之間、一端申付処仁、公用無沙汰之間召放、令直務訖、一彼堂衆等歎申云々、是者何之堂於指申事哉、不審有申事及返答者也、

一從往古為三分一不出云々、是又言語道断言上候、先年及意見処仁無定量非抛通、為奉行被一決訖、

一堂衆等掠申歎云々、度々及三問三答、理非聞召、被分直務通、依被仰付間、掠申子細、何事哉、悉皆 上意蔑如被申事、其科難通者哉、所詮先々任御成敗、無改動之儀、被仰付候者、弥天下泰平、可奉抽御遺 運長久懇祈者也、仍謹支粗言上如件、

永正十四年七月 日

五〇七 東大寺乾長壽三問状案

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書(五函五〇号)

〔編纂書〕八月九日巳刻ニ写候

東大寺乾長壽謹三問 言上

右、摂州長洲野地・前田開発田之事、法花堂衆支言上之趣掠申子細、雖為事旧、先不弁等持院殿樣御判御下知之由来、每度恣令言上事、是第一也、申掠条、令輕於上意云々、此語還而非述自奸曲之過失乎、

一依無証跡耀於執金剛神歎、奉勸請神明・仏施、雖意願、各別誰不先天下安詮 御貴運哉、雖然〇不受於非礼、何以之為奸訴之由、併〇無道理、似求由於傍者哉、

一堂衆与為不相談、等持院殿樣御判御下知令拝領事、為一方向之支証之条、不可為証跡云々、言語道断狼藉也、被召放法花堂領、依被補東山常在光院料所、既數ヶ年不知行之処、相語長壽先祖太輔得業、從令頂戴御還補之御判已来、於預所職者、聊無他妨致存知、於所出分者三分一令約諾、既及二百ヶ年無相違之処、種々之奸訴、甚無道之至極也、

一從明応元、所出号無沙汰事、先年御糺明之時、再三如令
○上、薬師寺長盛当庄代官之明、号損免請口半分寺納之
間、任所在令所下之処、不依寺納之有無、以他足所出之
由、理不尽申募、剩相語宗益、致一円知行之条、不及了
簡奉待有道之御成敗之時節処、永正五御掃路之砌、証文
等依備 上覽、不能左右被成下 御下知、全領知之処、
又永正八雖堂衆申掠、可到直務之由訴申、被訪意見、半
分宛可令所出之由被成下 御成敗訖、其段無先規之条、
企追訴歎申処、結局一方向預御成敗之条、歎猶有餘、所
詮從 等持院殿様已来、任 御判御下知之旨、可全領知
之由被成下 御下知者、弥可抽 御貴運長久之勸祈者
也、仍粗謹言上如件、

永正十四年八月 日

五〇八 法華堂衆陳状

京都大学総合博物館所蔵文書（九函七号）

南都東大寺法花堂衆三答状 永正十四 八 十八

東大寺法華堂重支謹言上

右、法花堂執金剛神領摂州長洲庄野地・前田村事、為本
所領、既及八百年知行無相違処也、

正送状在之、

一又永正八、雖堂衆申掠、可致直務由訴申、訪意見、半分
宛可令所出由云々、自上古年貢半分送状、曾以無之、又
其段無先規云々、元来請口定間、無先規事勿論也、若
上裁千万及御猶予者、於天下惣別請状、可無其詮者哉、
所全任永正八 御裁許之旨、可令全直務之知行旨、被成
下御下知者、弥可奉抽天下安全 御貴運万歳之精誠者
也、仍粗謹言上如件、

永正十四年八月 日

五〇九 執行所叡美長洲莊所出錢請取状

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書（六函一八号）

九三郎三十九カウノウケトリ

請取 卅講長洲庄所出分事

合伍百卅五文者、四百帖之代、

右所請取候状如件、

永正十五年戊戌十月十九日

執行所 叡美（花押）

五一〇 如来院文書

如来院文書（『尼崎市史』一）

一不弁等持院殿御判御下知由来云々、古今御成敗曰、不帶
本所拳状、致越訴事、諸国之庄公并神社・仏事領以下、
以本所拳状可經訴詔之処、不拳其状者、既背道理也、乾
長寿自問自答之言上、言語道断次第也、

一被補東山常在光院料所、數ヶ年不知行云々、只今乾言上
何事哉、雖然当堂御寄附之証文、嚴重之支証明鏡也、依
為理訴、立還知行數百年、于今為法花堂領知行之上者、
此條被訴申上條、不能覺悟者歟、

一於所出分者、三分一令約諾、既及二百年無相違処云々、
乾先祖大補得業賢幸・法橋春増請状曰、当庄御年貢每
年百貫文、於年内無懈怠可沙汰進、依天下一同之大損
亡、扨地之時者、可被下檢見之使事、此言、堂衆与乾約
諾分明也、其外為一事令違犯者、日本国大小神祇冥道神
罰於可罷蒙八万四千毛穴由、分明仁書載者也、今又守次
企濫訴事、不輕其科者也、依奸曲計略、擬奉掠 上聞及
訴詔条、奸謀之至、謂有余者也、

一薬師寺長盛当庄代官之時、号損免、請口半分寺納之間、
任所在令諸下処、不依寺納之有無、以他足所出之由、理
不尽申募并剩相語宗益、致一円知行之条、不及了簡云々、
一大事、堂社領、依難捨置、及上裁、任理運令直務、万

永正十六年二月十七日、細川高国柵于摂州尼崎築城、

五一一 細川高国奉行人齋藤貞船奉書

寺岡文書（『兵庫県史』史料編中世一）

長塩又四郎申、当庄浦浜境目事、従太嶋庄令競望候間、被
遂糺明之処、於大嶋者一向無支証之言上也、至当庄者、四
至傍尔証文在之上者、向後可停止違乱之旨、被成奉書於大
嶋訖、不可有相違之由候也、仍執達如件、

永正十六年五月廿七日

貞船（花押）
摂州武庫郡 浜田庄名主沙汰人中

五一一 乾代勸学院長洲莊未進注文

京都大学総合博物館所蔵宝珠院文書（一函四号）

乾代勸学院未進辻書事

百五十貫文 永正五六七 三ヶ年未進

廿七貫五百文 同八年 ○反錢未進申

四十五貫文 同十一年代 未進

三十貫文 同十六年 未進

廿七貫五百文 同十七年 ○反錢未進

合二百八十貫文 未進

東大寺中性院襖下張文書（『南都佛教』一〇二）

証文日記

- 院宣 一通
- 別当寄進□^(状) 二通
- 乾請状 一通
- 大補得業契状^(ノリ) 一通
- 細川殿様^(御) 御奉書 一通
- 御奉書 二通
- 同半分之時 一通
- 御奉書 一通
- 問 三答状

永正十七年
永正十七年
永正十七年
永正十七年
永正十七年
永正十七年
永正十七年
永正十七年
永正十七年
永正十七年

同十四年
問状三通
法花堂方
以上
法花堂
三月廿一日 納所弁弘（墨長方印文「訓□」）
○永正十七年以降の史料であるので、しばらくここに収める。

五二四 長洲莊野地・前田公用銭算用状

□地・前田御公用銭算用状之事
合 永正拾七辰分
百貫文内、
残五拾貫文内

五十貫文者勸学院江
算用可申、

一 拾貳貫五百文、

守護役銭貳拾五貫文内
半分定、残分勸学院算用、

一 拾貳貫五百文、

当損免五拾貫文之内半分
廿五貫文者此方失墜、残而
貳拾五貫文内半分御方分、

一 参貫九百七十五文、

尚残半分勸学院江算用、
毎年堤修理入目拾五貫九百文、
内七貫九百五十文、此方失墜、残
半分七貫九百五十文、内又半分
御方分、猶残半分勸学院江算用、

一 六貫百八文、

東野堤足拾貳貫貳百十七文、
内半分定、御方分、残半分、
勸学院へ算用、

一 壹貫五百文、

近年新不成分、残参貫文
半分定、残半分勸学院江
算用、

一 四拾□五百六十文、

林三郎右衛門方へ度々渡之、
辰年巳春迄林方度々
在庄、

一 壹貫貳百文、

并七拾八貫参百四拾文内

五拾貫文、 前之分銭引申之、

残貳拾八貫参百四拾文、 過上、

右算用状如件、

御不審之事候者

又申候、此方過分□□

承候て上使へ可
申分候、尚々去年之事者

迷惑無極候、

一段不熟被申斗候き、已後
不可成引替候、

永正十八年二月 日 (花押)

東大寺法華堂納所御坊

【増補】

一 薬師寺長盛書状

東大寺中性院襖下張文書（『南都佛教』一〇二）

薬師寺安□□

東大寺祐春御房

進覧

五一五 永弘氏輔書状 宇佐八幡宮文書（永弘文書）
〈『大分県史料』五〉
氏輔在京之時、所々預所□□つの国かたいま今時なミ庄六百貫所・同国ひかしな家難ハ五百五十貫・同国御園庄三百六十石あし、是豊前国宛給所あつかり候て、土貢をはいたうする、

十一月五日

氏輔 (花押)

いこのため二しるしおき候、

あまかさぎの公事をも聞て候、

〔尾題〕

しとみより

申させ給へ御返事

氏輔

○永正年間の史料である可能性が高いので、しばらくここに収める。

長洲段銭之事、子細示給通、藤岡孫右衛門尉申候、左候間
涯分堅雖申付候、被仰懸新儀候様□、存迷惑或候也、尚々
申事候、殊不可致沙汰由成敗等被申請族共へ可申返事之条
失墜惑可行くと申、悉敵蜜ニ沙汰之儀、被調候間、何様ニも
致調法、五千足取沙汰可申候、更不可有如在之儀候、恐々
敬白、

八月十日

長盛 (花押)

東大寺祐春御□

進覧